

認知症ケア向上のための多視点観察情報に基づく状況理解と共学に関する研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2017-12-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柴田, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024348

(課程博士・様式7) (Doctoral qualification by coursework, Form 7)

学位論文要旨

Abstract of Doctoral Thesis

専攻：

Course：

情報科学

氏名：

Name：

柴田 健一

論文題目：

Title of Thesis：

認知症ケア向上のための多視点観察情報に基づく状況理解と共学に関する研究

論文要旨：

Abstract：

本論文は、認知症の人を理解して適切な支援につなげるための認知症支援システムについて論じたものである。認知症は「一旦正常に発達した知的機能が持続性に低下し、複数の認知機能障害があるために日常生活・社会生活に支障を来すようになった状態」を指す。認知症の人が生活の中で支障を来す状況を客観的に評価する手法として、行動観察方式 AOS(Action Observation Sheet; AOS)がある。AOSは、認知症の人の生活状況を問う設問に対し、ケア関係者が認知症の人の行動を観察して記述する観察式認知症評価法である。本評価法は、厚生労働省が推進している 900 万人以上の認知症サポーターの養成講座において認知症理解支援ツールとして公式に採用されており、考案者である敦賀温泉病院の玉井顯医師を中心として 25 年に渡って現場で洗練されてきた、認知症評価において実績ある評価法である。一方、AOS による観察情報だけでは評価が難しい領域があるため、玉井は認知機能の程度や脳の状態といった認知機能評価情報、そして複数人による観察情報を暗黙的に統合し、認知症の人の状態像把握を属人的に行ってきた。専門的知識と豊富な経験が求められる認知症の人の状態像把握を、家族を含めたケア関係者につなげるため、玉井が暗黙的に行っているプロセスを 2 つの観点に基づきシステム化した。1 つ目の観点は、認知機能低下に伴って生じる行動や、表出している症状と認知機能状態との差など、客観情報だけでは評価が困難な、認知症の人を直接評価することで得られる認知機能評価と観察評価に基づく状態像把握のプロセスである。2 つ目の観点は、一人の観察者では観測しきれない部分も含めた、多面的に認知症の人の状況を理解するための多視点観察評価による状態像把握のプロセスである。本研究では以上 2 つの観点に対し、玉井と連携して ICT によって AOS を発展・改良し、認知症の人の状況理解を深化する認知症支援システムを開発した。

まず、1 つ目の観点に基づいて発展させた認知症支援システムについて 3 章で述べた。認知機能評価と観察評価に基づく状態像把握を支援するため、高次脳機能評価の専門家であ

る玉井が考案した、認知機能評価に用いる脳機能評価バッテリー (Brain Function Battery; BFB) を AOS と組み合わせることで、脳の状態も考慮した分析が行えるように改良した。なお BFB も認知症サポーター養成講座において認知症理解支援ツールとして公式に採用されている実績ある評価法である。認知症の人の症状理解や客観評価の高度化のため、連結可能な両評価法によって得られる観察情報と認知機能評価情報を集約するデータ構造を設計し、多視点観察情報としてケア関係者に提供する認知症支援システムを開発した。提案する認知症支援システムは、本人の行動や振る舞い、認知症の人の脳の状態、そして本人とケア関係者との関係性理解につながる情報をケア提供者に提示する。システム開発にあたって、医療・介護現場と連携しながらシステムの改良を行い、評価改良によって、現場で運用可能なシステムを実装した。認知症ケアの入口である病院にて 4 ヶ月間におよぶ実運用評価を通して、提案システムが提供する多視点観察情報が、家族の認知症の人に対する理解を深化し、医師と看護師による定性評価から運用の効率化につながることを示した。また、デイケアでの評価実験を通して、提案システムが提供する多視点観察情報が、ケア従事者に対する定性評価から認知症理解深化につながることを示した。

次に、2 つ目の観点に基づいて発展させた認知症支援システムについて 4 章で述べた。多視点観察評価による状態像把握を支援するため、複数人による AOS の記述内容に着目した。複数人のケア関係者による AOS の記述内容を集約し、各観察者による記述内容の比較提示による多面的な認知症の人の状況理解を支援するシステムを開発した。提案手法によって、一つの認知症評価観点に対して多視点性をもたせた。多視点観察情報によってケア提供者に新たな気づきが促されるか予備調査を行った結果、提案システムによる介護関係者間の認識の違いの可視化が、本人との関係性、家族の認知症の人に対する捉え方の検討に活用できる見通しを得た。そして医療現場にて評価実験を行った結果、問診場面の会話分析から、医師と家族・認知症の人とのコミュニケーション促進によって認知症の人に関する新たな気づきを促したことを示した。ケア現場であるデイケアでの評価実験では、ケア従事者のアンケートから、家族と本人との関係性や家族の関心の程度の理解につながり、実際のケアに役に立つことが分かった。提案システムが提供する多視点観察情報が、ケア関係者間で認知症の人をどのように捉えているか共有することにつながり、他者の視点を新たに理解することが認知症に関する共学を促すことを示した。さらに、他者の視点の学びが認知症理解深化につながったことから、ケア関係者が他者の視点を学ぶことで、多視点で認知症評価ができるように支援するための認知症学習支援コンテンツを制作した。AOS をベースとした認知症の人に関する観察情報に対し、ケア提供者や専門家が解釈を付与することで、他者の視点を学べるコンテンツを制作した。コンテンツを用いた共学の定性評価実験を行い、医師が解釈を付与したコンテンツによって看護師が他者の視点を学ぶことで、多視点による認知症の人の状況理解深化につながることを示した。

多視点観察情報の概念を AOS に導入して発展させたことで、ケア提供者が連携し、認知症の人の状況や状態を考慮した多職種連携による認知症ケア実現につながることを示唆された。